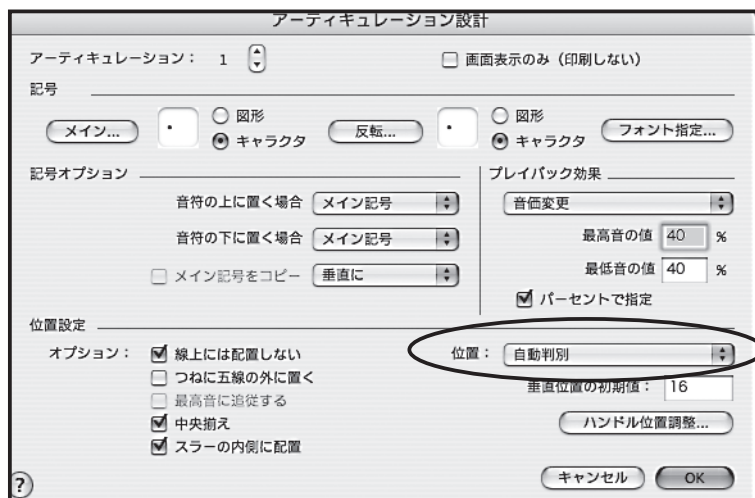


## スタッカート の位置

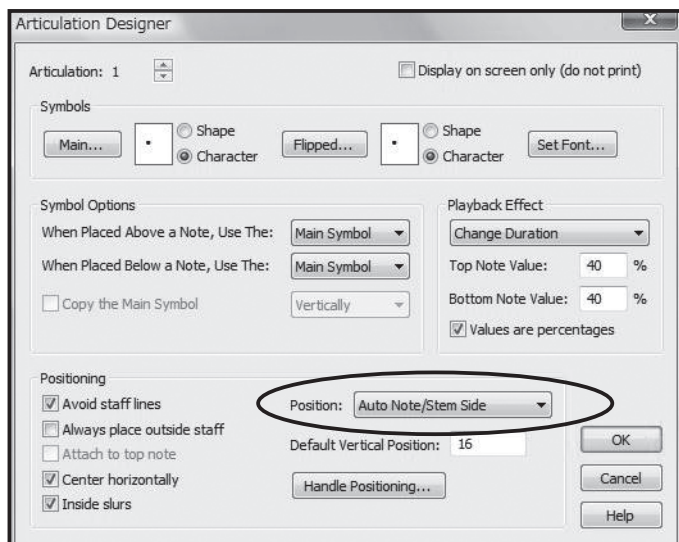


一般にスタッカートやテヌート等のアーティキュレーション記号は符頭側に付くものですが、上例のような二声部の場合は、上声下声ともに反対の符尾側に付けられます。この時に問題となってくるのが水平位置で、符頭側なら疑いなく符頭への中心揃えとなるものの、符尾側となると符頭に合わせるのか、または符尾に合わせるのか迷うところです。上の2例ではテヌートとアクセントはともに符頭への中心揃えですが、スタッカートは (A) では符尾への中心揃え、(B) では符頭への中心揃えとなっています。

さて、この両者ですが、どちらも正解と言えそうです。我が国の手浄書ではその両派が存在してきており、西洋の彫版では (A) の様式が多いように思われます。ただし、本例の元にしたショット社版では、もちろん手作業ならではのバラツキがあるものの、(B) の符頭合わせになっていますので、絶対的な規則はこの問題でも存在しないと言えるでしょう。ともあれ、Finale の現行バージョンでデフォルトファイルに用意されているスタッカートを付ければ、(B) のようになります。ただし、開発者が (B) 様式を第一選択と考えたからとは断言できません。出来る限りの自動化を重用視するならば、符尾側付けでも符頭への中心揃えとしておいた方が好都合だからという理由も、これは決して無視できないと思います。



左はアーティキュレーション・アイテムの設計ボックスです。最近の機能ですが、ここに「自動判別」というオプションが加まりました。下に英語版も掲載しましたが、Auto Note/Stem Side というのが原語で、つまり符頭側付けか符尾側付けかを「自動判別」するという意味です。これは、レイヤーオプションによって上声符尾は必ず上向き、下声符尾は必ず下向きとなる二声楽譜において、そのような、符尾の向きに強制が掛かる時には符尾側付けとして、そうでない時には原則通りの符頭側付けとするものです。また、単声で符尾を手動反転させた場合にも、Finale はそれを強制されたものと見て、符尾側に付けてきます。



このオプションは Ver.2007 か 2008 からの追加だったかと思いますが、良く出来たもので、一つのアイテム設計のみで符頭側、符尾側の双方に対応しています。しかしながら、もしもスタッカートの符尾側付けで (A) のように水平位置を符尾合わせにしたいならば、もうこのオプションでの自動化は不可能です。符尾というのは上向きなら符頭の右側に、下向きならば左側に付きますので、それに対応できないからです。伝統を尊重する Finale といえどもプログラムの都合というものがある以上、無条件にそれに従うのは禁物でしょう。今回の問題については、実のところアイテムを2つ用意して使い分ければ (A) 様式を簡単に実現できます。次回はそれについて整理する予定です。